

MSI通信

Vol243

2年に一度、大統領選の間に実施されることで中間選挙と呼ばれる米議会選挙。11月8日に投票が行われ、その結果に注目が集まりました。

●民主党善戦も議会はねじれ状態に

報じられたように、事前予想の共和党圧勝とはならず、民主党が予想外の善戦ということになりました。本稿を執筆中の時点で、やっと下院で共和党が過半数の218議席に達する見込みが伝えられています。ただし、日本時間11月17日15時の時点で民主党も211議席確保が伝えられており、残りは6議席で、結果としては僅差ということになりそうです。

今回は、郵便投票など期日前投票が前回2018年の選挙より20%も増加したこと、無党派層の取り込みという点で、民主党の獲得票数増加が接戦につながり、結果判明に時間を要したとされます。

ハリス副大統領が議長を務める上院は、定数100のうち50議席を民主党が確保しており、過半数を占めます。これで2023年1月に始まる新議会は、上院民主、下院は共和が多数派という、いわゆる「ねじれ議会」が生まれることになりました。

下院は予算など財政面で優先権があり、上院は主要閣僚や米連邦準備理事会(FRB)理事や最高裁判事などの承認権を持っています。過去のねじれ議会がたどった経緯から、今後、共和党の協力なくしては予算案をはじめ法案の成立が進まないこととなります。まず懸念される最大のものが、連邦債務上限引き上げ問題です。

●政府に課されている「債務上限枠」

米国は連邦政府の公的債務の上限

米中間選挙ねじれ議会確定、2011年悪夢の再来も

を法律で決めており、それを超える借金はできない仕組みです。現在の上限は31兆4000億ドルです。

2021年10月に一時的に4800億ドル引き上げる法案ができたものの、その資金枠も2カ月ほどで枯渇するとのイエレン財務長官の要請で、同年12月、新たに2兆5000億ドルを付加、31兆4000億ドルとされました。この増加枠を使い、国債の利払いなどに充てられた経緯があります。民主党が上下両院で多数を占めていた状況下でも審議は紛糾し、ぎりぎりでデフォルト(債務不履行)を回避することができたのです。

●ねじれ議会とデフォルトの危機

その債務上限額31兆4000億ドルに対し、先月10月3日に財務省が公表したデータでは、公的債務は31兆ドルを超えていることが明らかになりました。30兆ドルに達したのは2022年2月で、わずか8カ月で1兆ドル増加しました。新型コロナウイルスの感染状況が落ち着くにつれて、増加ペースは徐々に緩やかになっていますが、新型コロナ感染拡大前に比べると、依然として速いことに変わりはありません。おそらく2023年に入り、早い段階で再び限度枠に接近し、デフォルト危機が叫ばれるとみられます。

その危機への対応に関する審議を行うのが、ねじれ状態となった新議会なのです。

バイデン大統領は、中間選挙の開票が始まった早い段階から共和党に対し、国家のためとして党派を超えての協力を呼び掛けていました。共和党の中でも保守派は、伝統的に小さな政府を標榜し、財政赤字の拡大を促しやすい債務上限枠の拡大に反対の立場をとってきました。しかし、この問題はそうした主義主張はともかく、デフォルトという国家としては非常に不名誉で危機的な可能性を

突きつけ政権を追い込む手段として使えることから、政策的な妥協を引き出すための政争の具とされることが多いのです。

●米国債の格下げに至った2011年

債務上限枠の引き上げを巡る民主・共和両党の対立が、金融市場の波乱につながったのが2011年でした。オバマ民主党政権時代のことで

当時共和党が支配していた下院とオバマ大統領は、財政赤字削減で真っ向から衝突していました。連邦政府の借入れが当時の法定上限の14兆ドルに達してもなお合意できず、財務省は年金基金の一部財源を流用するなど当座をしのいでいましたが、やがて万策尽きました。デフォルトの危機に金融市場では一気に緊張が高まりましたが、同年8月2日、ぎりぎりのところで合意が成立し、上限枠は引き上げられました。

しかし、米格付け会社スタンダード・アンド・プアーズ(S&P)は、8月5日金曜日に米国債の1ランク格下げを発表し、最上位格付けを失うことになりました。週明け8日の市場は、ダウ30種平均が前週末比で634ドル下落するなど、株安が各国に連鎖し、大荒れ状態になりました。

この時、もっとも反応したのがNY金市場でした。ドル建て金価格は連日過去最高値の更新を続け、8月22日に初めて1トロイオンス1900ドルを突破、終値が1891.9ドルとなります。11営業日で240.1ドルの棒上げ状態でした。ドル急落など米国経済に問題が起きた際に反応しやすいのが、金の特性なのです。

この時、S&Pが米国債格下げの主な理由の一つに挙げたのが、対立を繰り返す「決められない政治」でした。その同じ構図が、2023年の米国議会に生まれることとなります。

(11月17日記 クルー 亀井幸一郎)